

東日本大震災による水産業の被害実態と復興の足がかり

震災と原発事故からの復活
ふくしま海洋科学館

津 崎 順

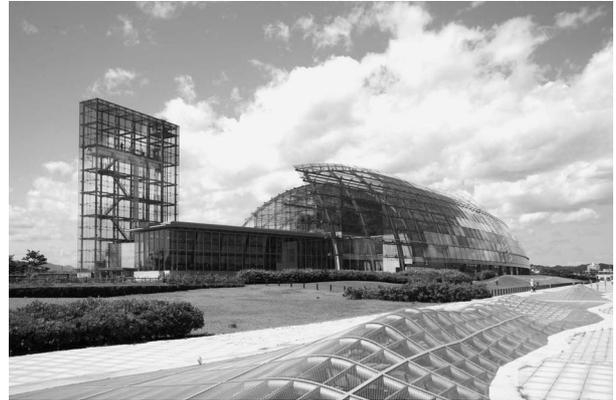
ふくしま海洋科学館

福島県いわき市小名浜港第2埠頭に立地するふくしま海洋科学館（愛称：アクアマリンふくしま）は、「海をとおして人と地球の未来を考える」を基本理念に2000年7月に開館しました。展示は「黒潮と親潮のであい～潮目の海～」をテーマに、福島県の河川と沿岸の生き物、カツオやキハダがイワシの群れを狙う水量1500 m³の黒潮水槽、コンブの中からサケを追いかけるゴマフアザラシなどを展示する水量500 m³の親潮水槽、サンマやメヒカリ（アオメエソ）など地元で水揚げされる生物、黒潮の源流にあるマングローブやサンゴ礁、親潮のふるさと海域の一つであるオホーツク海の生き物と海獣や海鳥など盛り沢山です。また、当館が精力的に行っているシーラカンス調査コーナーでは、世界で初めて撮影に成功した全長約30 cmのインドネシアシーラカンス幼魚の映像を紹介しています。体験プログラムも充実していて、「命の教育」を実践する釣り堀、水の中に裸足で入って生き物を観察するビオトープをはじめ、移動水族館専用車両「アクアラバン」なども活躍しています。

当館は、2010年7月に開館10周年を迎えましたが、累計入館者数が1000万人となる前に発生した東日本大震災（2011年3月11日）により大きな被害を被りました。

震災では、震度6弱の揺れと液状化現象に伴う地盤沈下、4.2 mを記録した津波に襲われましたが、幸いなことに来館者、職員は無事でした。主な被害状況を原因別に分けてみると次のようになります。

- 地震による直接的な被害：黒潮水槽と親潮水槽を仕切る上部アクリル板が、水面に生じた大波の衝突により一部破損。サンゴ礁水槽のFRP擬岩も同様に損壊。ガラス屋根の一部破損など。
 - 液状化現象に伴う地盤沈下：建物周囲に生じた約1 mの段差と土砂の流出入。屋外人工ビーチの漏水、館内外を結ぶ上下水道管、水槽配管の破断など。
 - 津波による被害：半地下室にある電気、機械設備の水没、損傷。海水取水ポンプ施設の水没。繁殖、飼育予備水槽棟の水没、損壊など。
- これらの原因は複合して被害を増大させ、飼育環境を



ガラスに覆われたアクアマリンふくしま



潮目の大水槽（左：親潮、右：黒潮水槽）

維持する機能を全て失いました。続いて東京電力福島第一原子力発電所事故が追い打ちをかけ、3月14日に職員は自宅待機（各自の判断で自主避難）という指示を受けました。トド、セイウチ、ゴマフアザラシ、ユーラシアカワウソなどの水生哺乳類、ウミガラスやエトピリカなどの海鳥は、16、17日の両日、鴨川シーワールドの職員の懸命な救援活動を得て搬出しましたが、20万点の飼育生物の内の9割を失いました。

職員の一部は、自己責任の下で復旧作業を進め、4月に入ると生き残っていたシロチョウザメ、アメリカカブトガニ、オオサンショウウオなどを新潟市水族館、東京都葛西臨海水族園、井の頭自然文化園に輸送すると共に

館内で淡水魚および展示植物の管理を続けました。

4月25日、上下水道の仮復旧に合わせて通常勤務体制に戻ると、展示水槽設備、海水取水施設、観覧エリアの復旧を最優先で行いました。展示生物は、各地の水族館から贈られ、120日あまりの休館を経て7月15日の開館11周年記念日に再開しました。記念式典では、避難先で誕生したゴマフアザラシに、震災からの復興の希望になることを願って「きぼう」と命名しました。

福島県は、地震と津波の自然災害だけでなく、原発事故という人災にも見舞われました。当館の再開が子供たちの笑顔につながり、震災から復興するための狼煙（のろし）になることを願っています。

最後になりましたが、全国各地の動物園水族館にお世話になったことをはじめ、たくさんの皆様からご支援をいただいたこと、励ましのメッセージが私たちの力になったことについて、この場を借りてお礼を申し上げます。